

# 海軍

## 我が青春の戦争体験記

愛媛県 根津 茂

私は、四国愛媛県南予地方の一山村で貧農の長男として大正十五年三月十五日に生まれました。祖母、両親、姉一人、弟三人との八人家族で、父は農業の傍ら建築大工として働き、昭和初期の不況時代を過ごしてきました。

また、そのころ村の青年訓練所指導員として勤めていた。私が小学校へ入ったころ、日本は富国強兵のスローガンの下で、軍事教育が盛んであった。国民はすべて国策に従い、軍国主義が強要せられ、次第に日中

戦争へと進展していくところで、昭和十二年七月七日、突如日中戦争が始められ、戦闘は中国大陸の全域まで広がり長期化の様相を呈していた。国家総動員法が発せられ戦争完遂のために、盡忠報國、挙国一致、堅忍持久といった言葉が盛んに使われていたところである。

小学校時代より青年期を迎えた私は、先輩達が年末年始の休暇を利用し軍服姿で颯爽と帰省して来るその雄姿に憧れたものである。

また、海軍軍事普及部による軍事講演会等に出席し、いやが上にも青少年の心を動かすことになったのである。

やがて適齢期に達した私は昭和十六年度に帝国海軍に志願し前期試験に合格したが、不採用に終わり、後期試験に、満十六歳にして、掌電信兵に合格。佐世保

鎮守府より連絡あり、昭和十七年五月一日「佐世保第二海兵団に入団すべし」との採用通知を受領したのは、我が国が太平洋戦争に突入したばかりの昭和十七年一月であった。

ハワイおよびマレー沖海戦と初戦では次々と大戦果が発表され、国民の士気を高揚させたものである。軍艦マーチに続く大本営の発表に毎日耳をかたむけ、血湧き肉躍るの感であった。いよいよ世界を相手に戦わなければならぬ大戦争となった。国民は総力戦の体制で臨み軍需工場へと、若い者は、次々と徴用令に依って農村から都会へかり出されて行く。戦争に勝抜く事を信じながら、戦場へまた工場へ。

四月二十六日、海軍軍人として佐世保へ出発前夜、地域の皆さんで氏神様に武運長久の祈願をして戴き、親族や近所の友人で門出を祝って翌日早朝八キロばかりの道を見送りの人々と共に、徒歩にて国鉄吉野生駅に向かう。途中八年間通った小学校に立ち寄り恩師の先生方および後輩達に別れを告げ、村内で一緒に出発する加藤君と合流する。彼は十七年より初めて採用さ

れる整備兵として入団するが昭和十九年南方で戦死している。

故郷の両親はじめ見送りの方々には駅頭にて別れの挨拶をすませ、定刻に発車する列車に乗り込み県内集合場所となつてゐる八幡浜港に向かう。当時列車は卯之町までで止まり、卯之町、八幡浜間は国鉄バスであった。

八幡浜棧橋前の旅館にて一泊、県下各地より集合する入団者を待つ、県の職員に引率され別府行き定期船「第十三字和島丸」に乗船八幡浜港での見送りは棧橋を埋めつくすほど大勢であった。八幡浜商業学校出身者もあり同校の音楽隊の演奏で出港を見送って貰う光景は今も記憶に残っている。

別府で一泊し翌朝別府発の専用列車で佐世保に向かう。沿線では、四月二十九日「天長節」でもあり、子供たちが日の丸の小旗を振りながら専用列車に乗った我々を見送ってくれた同日、午後四時頃佐世保駅に着く。

駅に着くや、赤い腕章を付けた下士官が、大声で叫

ぶ。各地から到着した入団者で混雑しているため、矢竹練兵場へ誘導するための大声である。駅の近くにあり練兵場にて早速兵科別、分隊毎に整理され、次々と隊列を作つて徒歩にて相の浦に向かう。

佐世保第二海兵団は昭和十六年に相の浦分団として発足、昭和十七年より第二海兵団となつたところ。第一海兵団より四、五キロ離れた相の浦港畔にまだ増設中であつた。本部兵舎は高台にあり。練兵場側に九兵舎まで完成していた。付属の施設は建築中であつた。

夕暮が迫る頃相の浦に着き団門を潜る。燈火管制が実施されて練兵場は薄暗い。自分達は新兵舎で第九兵舎の二階に入った。腹がへつているので早速夕食がわりに竹の皮で包んだ炊き込みの飯が配られ、食事が終わると釣床（ハンモック）のおろし方と収め方の指導を受ける。約一分間以内で、釣床をおろさねばならない。先輩達のきびきびした動作には驚いた。釣床にて入団第一夜を明かす。翌日身体検査があり合格した者は各教班に編成され、被服その他の支給品を受取り、軍服に着替え、私服を小包にして家に送る。軍服を着

れば即兵隊である。総ての行動を敏速に、節度を持つて行わねばならない。団体では必ず整列隊列をつくつての行動である。

また、何事も行動をする場合に必ず十五分前、そして五分前の号令がかかる。五分前には必ず次の行動に移れる状態で待機していなければならない。これが海軍の鉄則である。

また、笛（パイプ）一声を聞いたならば、必ずそのままの状態で静止することである。手をあげていれあげたまま、これをやかましく言われたものである。

入団式が終わると本格的な基礎教育訓練が始められる。第九兵舎には掌信号兵の候補者分隊一個分隊と掌電信兵候補者三個分隊が入つていた。何れも教班長の他に特別に信号教員、電信教員が配属され特別教育が行われていた。一般水兵の必修課目は担当の教班長より徒手教練より始まり陸戦演習、実弾射撃に到るまでの教科があり、短艇遠漕、手旗信号、運用術等、一般教養科目を短期間で修得せねばならなかつた。特に短艇漕は大変である。右舷に六名左舷に六名と十二名の

呼吸が合わなければ舟は進まない、六丁の櫂が揃わなければ駄目である。

教班長の笛に合わせピーピッ、ピーピッと調子よく漕ぐことが出来るようになると各班毎の競漕がある。

競漕に負けると練兵場一周また二周駆け足をやらされる。夕食後の演習時間には専門のモールス信号の受信訓練と、一時間の余裕もない。分隊長の精神訓話中居眠りなどすると後で徹底的にしごかれ罰直を受けることになる。

検定射撃と艦務実習が終ると卒業試験があり速成教育が済む、一般水兵より一ヵ月速く新兵教育を終わりに立錫のマークを一個貰い三等水兵として退団する。

相の浦海兵団をあとに、横須賀に向かう。各人が衣囊をトラックに積み込み帽子缶を手持って団体旅行で列車に乗る。下関、門司間はまだ直通になってないので、連絡船にて渡る。東海道線を大船にて横須賀線に乗換えて、浦賀駅まで。これより久里浜まで徒歩にて通信学校まで二時間位かかる。学校の所在地は、有名な幕末の頃黒船が入港した久里浜にあり、海岸にペ

リー艦隊入港の記念碑が建てられていた。

海岸通りより平張川を上りしばらくすると、白壁の四階建本館および兵舎、講堂等数棟見え大きな無線の鉄塔が建てられ通信学校としての偉容を示している。校門を潜り校庭にて担任教員による人員点検があり、横須賀、呉、舞鶴、佐世保の各鎮守府より集まった同期生と共に第二兵舎に入り、八ヵ月の厳しい教育を受けることとなる。正式に申せば、横須賀海軍通信学校第六十二期普通科電信術練習生として入校したのである。

事前に電信符号は暗記しておくように連絡されていたため、受信速度は、一分間三〇文字程度はほとんどの者がマスターしていたようである。入校一ヵ月後の査定の結果、交信班に残る者、一部暗号班に廻る者と区別され、本格的な送受信訓練がはじまる。訓練はすべて講堂内の各教室にて行われ、各分隊に割当てられ講堂当番により各班毎の名を記した講堂札が掛けられ、準備したところへ学習時間割に従い各室に入り練習する。担任教員の電鍵による送信を受信用紙に受信

練習、また暇さえあれば書字訓練（速記）の明け暮れであった。

一週間に一度行われる査定に誤字、脱字があれば減点となり、点数による罰直が厳しく行われた。次第に受信速度が早められて行く、分速八〇文字まで進んだころ、急性咽喉炎に罹り十日間入室することとなり今まで満点で通して来た受信査定も、入室十日分遅れたため脱字が出て思うような受信が出来なかったが罰直は免れた。

速度が進むにつれて送信の練習が始まる。電鍵に指先を当てて手首の反動運動により短符と長符の組み合わせによるモールス符号を合調音語で発声しながら基本練習。

基本が充分出来てないと早く打つことが出来ない。また手くずれを起し、手が思うように動かなくなる。これが出来ないで電信兵としては勤まらないので大変厳しく教育されたものである。

唯一の楽しみは日曜日の外出で、各班毎に指定された下宿があり、夕方帰校時刻に遅れないように充分休

んで来ることである。下宿のおかみさんにやさしくして貰い実家に帰ったような一時を過ごし、月曜日からまた一生懸命にやる気をおこさせて戴いたものである。

次第に実戦に近い電波を発信しての通信訓練がはじまり、総仕上げの通信演習では静岡県の三島実習所に我が班は行くことになった。通演艦隊を編成して通信係を作り、旗艦「長門」は田浦実習所、三島実習所には水雷戦隊「神通」と伊十一潜であった。二週間後、交替で実習所に帰り、後期の演習を終了して帰校後、卒業試験があり、三月一日全教程を終わって無事卒業する。

各人の配属先が発表され内地部隊に止どまる者、南方第一線、艦船に乗り組む者、ここで運命の別れ道である。

練習生入校中で忘れられないのは、同県出身者の先輩に世話になったこと。辻堂演習で民家に宿泊し、江の島までの追撃戦で走り、足を痛めたこと。通信演習中一月の寒中で富士の裾野に雪が降り続く夜、教員の

洗濯物が紛失して取調べられ、全員禪一つの裸になり木刀で尻を存分に殴られたこと、連帯責任での制裁である。尻の皮が紫色にはれ上がりやがて黒くなって行く、軍人精神注入棒で徹底的に叩き込まれる。

学校より実施部隊の方がまだまだひどいと聞かされる。先任兵長が整列をかけ説教のあと古い兵隊より順次に殴られる。これは海軍の伝統的な制裁であり総ての者がこの制裁を受け耐えてきている。

いよいよ実施部隊へ転勤である。外地勤務者と艦船に配乗する者は卒業後即日退校して、横須賀第一海兵団に仮入団となり便乗船を待つこととなる。内地勤務の者は当日それぞれの任地へ向かう。仮入団第一分隊で待機中の転勤者は早くて三日で退団する者もいれば、数か月間船便がなく残る者もあり。外地より内地部隊に勤務となる者、様々である。自分の転勤先六十二警備隊がマーシャル群島の南端ヤルト島にあることをはじめて知らされたのは、仮入団して数日後であった。

横須賀第一海兵団第一分隊仮入団も二ヵ月余り。便

船を待つ身にとっては大変長い期間のようであった。在団中は様々な作業に使役として使われる。練兵場の整備、横須賀鎮守府の合同葬儀の要員、海軍病院にて死亡者の通夜等、あらゆる作業に引き出されたものである。

五月に入って幾日か過ぎた昼食後である。甲板下士官より呼び出され「直ちに退団準備をせよ」とのことである。いよいよ待ちに待ったマーシャル方面行きの船が廻航して来たのである。同僚たちと小踊りして喜んだ。衣囊に毛布を縛り付け、早速、運送用のトラックに積み込み本部前に整列、海兵団当直将校の激励の挨拶を受け、軍楽隊の演奏する軍艦マーチに続き、「螢の光」で送られ団門にて「帽振れ」の合図にて別れ、徒歩にて逸見波止場に向かう。

軍港衛兵に敬礼をし、待機していた内火艇に順次乗り込む。定員に達すると大小艦船の間を通り、軍需物資を積込中の、マーシャル方面行きの特設輸送船「乾祥丸」の舷梯に内火艇は横付けされた。先送りの荷物は早くも甲板に上がっている。やがて荷積みは終わり

最後の内火艇が着く。舷梯が引上げられる。ゆっくりと錨が巻き揚げられる。いよいよ前線へ向かって出港だ。

五月の太陽が沈み西の空が真つ赤になり始める。船はエンジン音を高くしながら方向を交換し、船首を南へ向け進む。浦賀水道を通り観音崎にかかる頃は、大分夕暮れに近く燈火管制のため燈りも全く見えない。数時間過ぎた時、誰かが「大島が見える」と言う。その声のする上甲板へ上がって見る。椿の島「大島」の姿がかすかに浮かんで見える。これで内地ともお別れかと思うと一抹の淋しさがこみあげてくる。仮入団中に家族と面会が出来た者はまだ良いが、自分のように誰一人面会もないままに戦地へ向かう者にとってはなおさら感無量であった。

船は暗闇の中の航行を続ける。燈火管制を嚴重に行い、夜間は特に甲板にての喫煙は禁止される。潜水艦の魚雷攻撃を受けないためにもやかましくいわれていた。

何ヵ月前に夜間浮上中の米潜水艦により煙草の火が

原因で撃沈されたことを聞かされ、夜間は甲板に出ることを禁じられる。

見張り警戒を充分にし一路南進。出港後三日目の朝を迎える。海は少しうねりが始まる、それが過ぎるとまた穏やかになる。二隻の船団は前後して見え隠れしながら太平洋の真つ只中に出る。スコールが来る前後には必ず風が凪いでくる。時々護衛駆逐艦「あさなぎ」が姿を見せるので、安心して見張り勤務の当直につく。

大分気温が上昇し直射日光を受けると肌が痛くなる、大分南へ来た感じだ。五月の中頃であった。便乗者とはいえ朝礼体操と、見張当直が割当てられていたので、前部、後部二個所で、見張勤務につく。船は潜水艦情報を受信しながら、米潜水艦の出没海域を避けて進路を東へ取りながら「航行中」と当直分隊士より伝えられた。

その頃北方戦線アリュシャン「アッツ島」守備隊の山崎部隊玉砕が無線放送により傍受され、便乗者総員集合がかけられ、便乗中の赤坂分隊士より発表があ

り、全員黙禱し冥福を祈る。

東寄りの方向を取りながら南進したので予定より三日過ぎて第一番目の寄港地トラック島に向かう。日の丸鮮やかに日本哨戒機が飛来し船団の前路を護衛してくれる。トラック島も間近になったようだ。もう心配はいらない。次第に島影が見えてくる、はじめての南の島だ。やがて山が見え椰子林がはつきりとする。誰かが「春島」だと叫ぶ。船は減速してゆっくりと進む。無事入港だ。

春島は、トラック諸島の中四季諸島「春夏秋冬」島と違って一番重要拠点で、南方第一線基地の要衝であり、第四根拠地隊司令部、第四通信隊軍需部、警備隊等重要施設がある。春島の北側に艦隊錨地があり、大艦船が停泊中であつた。春島沖で仮泊中一度上陸が許可され久しぶりに陸へ上がり入浴、洗濯等も出来大変皆喜んだ。

また、南の海の澄みきった海底まで見えるのに驚いたものである。春島にて五日間仮泊中、内南洋方面とくにマーシャル方面の米潜水艦の情報を確認し、駆

潜艇一隻の護衛にて六月に入つて出港する。

内南洋の海は大変穏やかで鏡のようであつた。進路を東へとり、四日後クエゼリンへ無事到着。大勢の同僚が下船する。第六通信隊へ転勤する同年兵達が三〇名位、他に数十名、司令部、警備隊、その他基地隊員達が上陸すると、荷揚げも終り、ルオット島に向かう。

ルオット島は第二十二航空戦隊司令部があり、飛行機二機分の機体が陸揚げされた。ルオット島には一日で荷揚げが終わり。クエゼリンに帰り荷揚げを行い、マロエラップ島（六十三警）、七五五航空隊の所在地である。

中型機の攻撃訓練が毎夜行われていた。この島でも補充の兵員と物資がおろされ次にウオッチエ島に向かい弾薬兵器物資を陸揚し、最後に南の端にあるヤルト島に着く。ヤルト島は南洋群島の東部でヤルト支庁の所在地であり、マーシャル群島行政の中心でもある。邦人も多く住んでいた。

ヤルト島、ジャンポールには通称「赤タンク」といって大きな燃料庫があり、重要な補給基地であつた。

群島は環礁で出来ているので、一番高い所は海面より僅か一メートルにすぎない。

内地を出て五十日の長旅であったが、心配された敵潜水艦の攻撃もなく無事六月二十八日、第六十二警備隊に入隊する。所在地は、ヤルト環礁内のイメージ島である。軍事上横須賀局気付、「ウ八三、ウ八九」の記号であった。軍事郵便所、施設部、軍需部、設営隊等があり、水上基地八〇二海軍航空隊、九五二航空隊イメージ派遣隊の本部兵舎等が同島内に建てられていた。

八〇二空は二式飛行艇六機、〇式水上戦闘機約十機、九五二空には水上偵察機が数機配備され、南東方面の索敵任務にあたっていた。

椰子林の中に格納庫、燃料庫、爆弾庫、魚雷調整場が分散し警備隊は滑走路を隔てた所に本部があった。同年兵である大分県出身の野上一水と二人で本部当直将校に転勤の報告を終え、第四分隊通信科電信室に入る。

各兵舎は床が一メートル位高く作られ床下は空間に

なっている南方独特の建て方である。各所に貯水槽が取付けられ、潜水艦給水用無断使用を禁ずと表示されている。飲料水は総て天水にたよらなければならない。井戸水は塩分を含んでいるので、比較的塩分の少ない水を掃除、洗濯用として使用していた。

電信室の北側の兵舎には、一ヵ月前、五月下旬南海第一守備隊としてタラワに増援の陸軍部隊（名古屋で編成）を乗せた輸送船「磐谷丸」はヤルト入港直前米潜水艦の魚雷攻撃を受け撃沈され、僅か生存者三〇〇名が救助されて仮入隊していた。全く丸腰であった。自分たちの便船「乾祥丸」は運良く無事に入港出来たものである。

入隊後主計科より防暑服と三種軍装を受取り着替えをし、翌日より勤務割があり当直に着くこととなる。

四、五日過ぎに風土病（ Dengue 熱 ）に罹り発熱し三日間休業する。皆一度は罹る風土病で一度で免疫となる。新参者の仕事。

初当直は放送電報受信と、電報取次ぎである。取次ぎの仕事は受信した電報を暗号室にて翻訳したものを

司令以下各科長に届ける仕事である。当直者以外は各種訓練、整備作業、陣地構築等の毎日であり、夜の巡検後は毎晩のように先任兵長による整列がかけられ、説教のあと精神棒（バッター）をくらう。古い兵隊より順次に行われ若い兵隊になるに従って数が増す。これは海軍の伝統的なしきたりというものであり、それも入隊後の平穏な時期のみであった。

九月頃までは、南国情緒を味わうような事もしばしばあった。九月上旬には新兵たちが大勢入隊してきたが一般兵のみで、我々電信室には誰も入隊しないので、何時迄も新兵のような当番をやらされる。練習生卒業の後輩が入隊するのは何時の事かわからない。

十月に入りある朝、突如イメージ島が初空襲を受ける。朝食前のことで離島より超低空での偵察であった。本部付近の椰子林を銃撃し早々に引き揚げた。対空戦闘の命令も間に合わない数分間の出来事であった。

情報によれば、南東方面に米機動部隊が蠢動しはじめたのである。マーシャル、ギルバート方面は警戒体制に入る。十一月上旬米軍はギルバート諸島の攻撃を

開始した。

マーシャル・ギルバート沖航空戦である。敵機動部隊に対し、マロエラップ七五五空より発進。隊長野中少佐の攻撃隊は大損害を与え多大の戦果をおさめたが、次々と機動部隊の増援により十一月中旬、タラワ・マキン島に上陸を開始した。六通（第六通信隊）宛の緊急信を傍受。ヤルト方面も、俄かにあわたしくなる。タラワ・マキン両島にはヤルトよりの派遣隊が出ていたのである。

タラワ島には三〇〇隻の上陸用舟艇が使用され、米軍海兵隊約一万八〇〇名、支援部隊は空母五、戦艦三、巡洋艦五を基幹とした各種艦艇を以って行われ、これに対して我が守備部隊は約四、五〇〇名の将兵が五日間戦って遂に総員玉碎した。

マキン島は、僅か五〇〇名の守備隊員に対して米軍六、四〇〇名の海兵隊が上陸、タラワと同じ支援部隊の攻撃を受け一日で陥落したのである。離れ島の戦闘は特に制空圏を持たない日本軍支援部隊にとってはどうすることも出来ない。一方的な米軍物量作戦により敗

退したのである。

ギルバート諸島が米軍の手中に落ちた十一月下旬より、年末にかけてマーシャル方面、特に一番近いヤルートに対する空爆が激しくなる。大型機B24による空襲が間断なく行われ、電波探信機使用不能となり各陣地、砲台も損傷し、諸施設も破壊されたが、軍需部、施設部の工具により修理可能なものは応急に補修が完了し対空戦闘に支障はなかった。

内南洋方面部隊指揮官の命令により対空施設補強工事が行われ、戦闘司令部、受信防空壕、送信防空壕が完成し、我々通信隊の者は三個所に分散して勤務に付く事になる。本部司令部内に、本直として送受信機、発電機室を取り、発電所が破壊された時のみ室内発電を行う。第六通信隊、第四通信隊との交信、東京通信隊の放送電報の受信を戦闘司令部内で行い、受信防では派遣舟艇の連絡交信、傍受、送信防で新聞、情報等受信していた。航空隊格納庫が破壊せられ大艇二機は更新機として横浜へ、四機残っていた大艇が使用出来なくなり、水戦隊はラバウルへ転進し水上基地も全く

なくなった状態で、滑走路には大穴があき使用出来ない。そのコンクリートを割り防空壕の上に積み上げ補強して一トン爆弾の直撃を受けても耐えられるように、空襲のない間必死の作業であった。

本部周辺は次第に椰子の木がたおれ、あちこちと爆弾の穴が増えはじめ兵舎も吹き飛んで破れた建物の残材で小さな小屋（待機所）を建て分散していた。

ある夜間空襲を受けた時である。本部当直のため待機所を出て司令部に着くと爆音、空襲警報が発令される。司令部には司令以下当直将校、電話員、伝令、その他大勢入って来る。爆音は本部長上空に聞こえる。B24二機である。シャーという音と共に地下から盛り上がるような物凄い「ドドン」という地響きがしたと思う間もなく司令部内の電灯がパッと消えた至近弾である。これは近いが何処だだろうと思いつつながらローソクに火がつけられたので出口に向かう。

B24の爆音は次第に消えて行く。しばらくすると警報解除となる。戦闘司令部内はまだローソクの灯りのみである。やつとの事で外に出る。月あかりに何か物

音のする方向を見ると電信の佐々木水長がやつとの事で司令所にたどり着き、受信防空壕がやられ半分が飛んでなくなつた事を報告する。中にいた者は全員戦死、B 24より投下された八〇〇キロの時限爆弾二個によりカマボコ型防空壕中央入口より北側半分が影も形もなく吹き飛んで、直径一〇メートル位の摺鉢状の大穴が出来ている。

通信科ではじめての戦死者三名、月のあかりをたより遺体探しに総員が三十分位かかり、土の中に埋っていた、柿平、中島、坪井の三名を確認、爆風で壁板が破れ屋根のみ残っていた兵舎に収容する。他に横須賀工廠より兵器修理のため派遣されていた技術将校以下十名も戦死。遺体が発見出来ず一夜を明かして翌朝遺体収容後全員火葬にする。壕の中に医務科の薬品が入れてあつたよう、椰子の木に包帯が何本もひっかかり風が吹く毎に不気味な音をたてゆれていた。

爆撃の物凄さをつくづく感じた。また自分たちで作つた待機所も被害を受けている。屋根を破り床に落ちた三〇キロ位の石は丁度自分が休んでいた毛布の上に

転がっているのを見て驚いた。本部当直に出るまでその場所に休んでいたのも運と災難は紙一重というが運良く命拾いをしたものである。当直交替がなかったら吹き飛んだ壕の中で通信科戦死者第一号の中に加わっていたのだつた。

その頃、イメージ島には陸軍部隊が増強されて上陸していた。陸軍の兵隊が転進して来る電報は事前受信していたので第二百二十二連隊であることがわかつていたので、もしかして自分の郷里愛媛松山の部隊なら知人もいるだろうと楽しみにしていた。

比島バターン作戦終了後、マニラに集結した百二十二連隊は、南洋第一支隊と編成替えられ、マギ方面の戦況によりタラワに向かつて進撃中、タラワ玉砕のためヤルトに止まり、連隊本部はミレ島に、第二大隊長古木少佐以下隊員はイメージ島に上陸した。なかに同郷人が二名。隣村の横山上等兵は陸軍通信隊員で度々語り合うことができ懐かしかった。空襲の時は何時も同じ壕の中で過ごしていた。陸軍無線通信隊員だつた。

昭和十九年一月八日。新年早々、空襲の激しくなったヤルト島の邦人、婦女子、非戦闘員、及び負傷者を内地へ送還するため輸送船「香取丸」が入港して来た。空襲の合間に短時間で乗船収容を終え、最後の内地便が出港する。「香取丸」が出港して数日後、ヤルトは再び米軍機動部隊の砲撃にさらされる。

総員配置につき戦闘配食がなされ敵上陸に備え陸海共同による防備体制をとり、完全武装で待機。本部司令所よりの命令を待ちながら、皆悲壮な決意で過ごすこと数時間。やがて爆音が消え、砲声が次第に静まり、不気味な一時、第二見張所よりの通報あり。「敵艦は上陸寸前にして、姿を消した模様である」と伝えてきた。

ヤルト上陸を変更した米機動部隊は、数日後、マーシャル方面の要として重要な六根拠地隊司令の所在地であるクエゼリンの上陸作戦を開始したのである。

昭和十九年二月一日、第六通信隊は次のような電報を発信する。

一、戦爆連合の大編隊による空襲を受け目下交戦中

二、戦艦四、巡洋艦四、駆逐艦四、本島を取り巻き砲撃続行中、敵は上陸を合図し礁内に輸送船十  
七、上陸用舟艇二百隻以上。キョー水道より進入中

三、我敵上陸部隊と交戦これを撃退す

翌日「全員突撃す」の電報を最期に、通信は杜絶したが受信に至らなかった。実には上陸を開始してより四日間の戦闘で、クエゼリン島の六根拠地隊司令官秋山少将以下全員は玉砕。以後状況不明であった。

クエゼリン島には第六通信隊へ転動した三十余名の同年兵が勤務していたが全員壮烈な戦死をとげた。ルオット島の二二航隊司令官山田少将以下の隊員二千数百名も米軍上陸部隊と戦い玉砕し、マーシャル方面の制海空圏は全く米軍の思うままになった。

三月に入り送信防当直の出来事である。ヤルトより南西三〇〇キロ海上に浮ぶエボン見張所よりの至急信を受信。

見張所には十名足らずの隊員が、ヤルトより派遣

され勤務していた赤道直下の緑の楽園であった。直接の交信をしていない見張所よりの至急通信で驚いた。暗号なしのカナ文電報である。

「敵駆逐艦一、輸送船一、我に降伏を勧告しつつ内海に侵入」

「棧橋付近に上陸する模様」「我これを反撃す」

「敵は棧橋付近より上陸を開始す、暗号書全部焼却。我突撃す。司令以下のご健闘を祈る。帝国万歳」

以上の電報を残し見張所隊員は全員玉砕した。電報を打電したのは所長として六ヵ月前六十二警電信室より派遣の浦部上曹に間違いなかった。電報は直ぐに司令に届けられ、激励電報を打電したが応答なし。数回繰り返り返し送信する。ヤルト本隊から何の救援も出来なままの離れ小島の玉砕であった。

この時、ヤルト本隊も空爆により対空戦闘の真只中であった。米軍の進攻により重要拠点がつぎつぎに玉砕にさらされ、何れ遠からず、我が身にもその運命の日が来ることを覚悟しながらの対空戦闘防備戦であった。

戦闘が終わると、「戦闘概報」として直ぐに大本営にヤルト速報を打電する。第六通信隊玉砕により、中枢通信隊を失ったヤルトは第四艦隊（トラック島）、第四通信隊と連絡をとり交信を開始し、あらゆる報告は四通経由となった。

クゼリンを失ったマーシャル方面の各島の守備部隊は毎日朝夕二機の小型哨戒機による偵察を受け、定期的に大編隊三〇機ばかりの空襲を受けるようになった。その度ごとに本部イメージ島は蜂の巣のように摺鉢状の穴があき、かつての緑したる椰子林は幹だけがローソクを立てたようにあちこち残った状態であった。コンクリートの建物だけが残り爆撃の目標にもなっていた。

補給路は絶たれ、孤立の状態で毎日戦闘が続けられ、食糧・弾薬の使用制限を行わなければならなくなった。対空戦闘でも本部付近に直接接近しない飛行機に対しては発砲せず、砲弾も一度に何発というように制限を受け、対空砲員は歯をかみしめながら耐えていた。

食糧も次第に二割減、三割減といったように主食の

米麦は、応急食糧（上陸戦に備えた食糧）を確保し余りの分を月々順次に減食されていた。司令は再三補給要請の電報を発信されたが、「無駄な電波を発信するな」と上部では受け入れられなかった。最早この島で戦闘を続けていくためには現地自活の方法を取るより他に道はなしと決心せられた司令は、現地住民に習った現地食に切り替えることを計画されたのである。

このため、陸上戦闘は陸軍、対空戦闘は海軍が受持ち、陸海共同の防備体制が作られる。持久戦に備え必要最小限度の本部戦闘員を残し、各隊は離島に分散現地自活の道に入る。

本部要員の食糧調達のため各人の特技を生かして、農園班、漁獲班、椰子実椰子蜜採集班等が離島へ行き作業を行い、本部へ送られた食糧により戦闘を遂行することが出来た。食糧輸送についても大変だった。空襲のない夜間を利用しての輸送である。週一回大発に積み込んだ食糧は「野菜、干魚、椰子実」と深夜本部棧橋に陸揚げされ、各隊より作業員が二名宛荷揚作業に出る。最大の食糧源は椰子の木である。椰子の実の

内側にあるコブラ、椰子の新芽より出る蜜を加工したチャカコト、豊富な魚介類であった。

本部付近でも畑を作り、西瓜、かぼちゃ等が出来ていたが収穫間近になった頃に限り、爆撃を受け吹き飛ばされ、食卓に供することが出来ないことが度々あった。内海には鰯の群が度々棧橋付近に近づきダイナマイトで捕獲して炊事へ運んだものだ。皆それぞれ食べられる物は何でも口の中に入れ空腹を満たした。

現地食に切換えられた頃の、空腹時には風が少し吹くとふらふらして歩くことが出来ない。ただ呆然としていた。栄養失調症にかかり、大分たおれた者もいたが、自活体制を早くから取られたため餓死する者はなかったが、主食の米麦の量を削られ、最期に月はじめと十五日の夕食のみ、お粥が一杯支給された。副食の木の葉と干魚のスープでは足りなくて、ヤドカリや椰子ガニ等を加えネズミ、海蛇まで取って食べたものである。

本部に残っている者は、それでも敵上陸の想定で陸上戦闘の演習が行われ、海岸線には地雷の代わりに爆

弾を埋め、敵上陸時には真管をすぐに取り付けられるように陣地構築に万全を期していた。電信室に勤務する者は、我が軍の戦況、米軍の発表する戦果と入りみだれる放送を聞きながら勝利を信じて戦ったが、真実は沖繩本島上陸と続き本土決戦までの状況を知った。

新聞電報により日本内地の様子を受信することも出来、月三回イメージ新報として発行、各隊に配られ情報の少ない兵隊達によるこぼれたものである。何よりの娯楽は空襲のない間に行われた演芸会であった。日本の祝祭日を開催日として度々行われ、士気高揚と慰安に役立つものである。

ヤルト島に対する米軍機の投弾数は今次大戦中、島の面積に比較して地中海のマルタ島に次ぎ世界で二番目だった。これは後日、米軍の発表で知ることができた。しかし来襲した飛行機数は偵察を含め延べ七、六〇〇機で島は実に形が変わっていた。対空戦闘で墜した敵機数は三〇機（正確な数は記憶になし）あまりであった。

対空戦闘及び爆撃による戦死者海軍一八〇名、ヤル

ート防備部隊は最期まで、島を死守し戦い抜いたのである。

これは最高指揮官海軍少将升田仁助閣下と、陸軍部隊の指揮官であった古木少佐との海陸共同作戦をとられ、一致団結した行動のためであり、隊員と上司の信頼感より生じたものである。

八月十五日、基地受信所にて司令以下本部將校全員集合し、重大放送たる玉音終戦の大詔を聞く。十五日以降、米軍の爆撃は中止され数日後、北東水道より米駆逐艦が入港し降伏交渉がはじめられたが、司令は頑として上司よりの命令が下るまでは、絶対に交渉に應じられなかった。九月五日やっと米駆逐艦上で降服文書に調印された後、守備隊全員を集め、

「この日を絶対死んでも忘れるな、国体護持と祖国再建に努力するように」

と切々と説かれ、最期に立台の上でよろよろと倒れかけ、それを近くにいた將校が抱きかかえた。

武装解除がはじまり士官の軍刀が一番先に取り上げられた。次に小銃である。菊のご紋を全部摺り消して

海中に投げ込んだ。機銃の弾丸、爆弾まで。何日か米軍上陸用舟艇に積み込み内海深く沈める。すべて米兵監視のもとで行われ、航空燃料等は滑走路に集積し米軍に引き渡す。

武装解除が終わり、南方地域より内地へ引き揚げの船が入港する見通しがついた頃であった。撃墜した三名の米軍飛行士処刑の責任を一身に負われた司令は、日本武士道の真を貫かれ、十月五日夕刻六時司令室において自決を遂げられた。

小雨の降る夕暮れの中全員集合して、告別式が行われた。温厚な人柄で隊員すべての者に信頼され、ヤルトの父として仰がれた司令閣下の立派な最期であった。

この司令のところに毎日のように電報を届けに行き、やさしい言葉をかけて戴いた私にとって、あの日の出来事は一生忘れることは出来ない。

升田少将の部下として島を死守し、任務遂行ができ、隊員が南海の地より無事生還し、祖国の再建に尽くすことができ、誇りに思う。

十月下旬、引揚げ第一便は病院船「氷川丸」で負傷者、病人を収容、第二便は巡洋艦「鹿島」で陸軍部隊を、最期に残存空母「鳳翔」にて海軍部隊が引き揚げられる。電信室の者は船との連絡等があるために最期の乗艦するまで勤務に就いていた。

壕内の電信室はきれいに片付けられ、最期の交信を終わって電源を切り棧橋へ向かい、米軍に荷物の点検・身体検査を済ませて最期の乗艦となる。

思えば二年五ヵ月、今は荒れ果てて見る影もないイメジ島との別れである。感無量だった。艦はマロエラップ、ウォッチエの残存海軍部隊の兵士を収容し内地へ直行する。東京湾に入り富士山の姿を眺めた時、戦争に明け暮れた者にとっては懐かしさと嬉しさで一杯であった。

浦賀入港後なつかしの母校の隣にある工作学校の復員収容部に入り、四、五日間復員の整理が行われ、昭和二十年十一月十六日復員、各人故郷に帰る。

内地も都市部は焼野原で驚く、つぎつぎと交通機関を利用してやつのことで村に着く。九月の台風で鉄

橋が落ち十キロの道を徒歩にて夜半家にたどりつく。

体調を整えて敗戦日本の再建に尽くすべく立ち上がる。先ず戦災の復興である。父と共に戦災のために焼け出された人達の住宅建築がはじまり、それ以来、現在まで、戦争という苛酷な最も厳しい状況の中で過ごした尊い体験を生かして、如何なる物事にも動ぜず努力することができた。

日本は高度経済成長を遂げ、物は豊富、一見平和な日常生活ができるようになったが、この陰には、五十年前の戦争とこれにかかわった人達、また戦争を体験し復員後祖国再建に従事した人達のためめない努力を忘れてはならない。戦争を知らない総ての子供達に、このことを伝えたいものである。

「何時までも平和な日本であることを念じながら」

### 【解説】

#### 第六十二警備隊

昭和十六年九月一日、第五十二警備隊編成。

大東亜戦争開戦時、第四艦隊の司令長官は海軍中将井上成美であり、南洋部隊として、グアム、ウエーキ

島攻略作戦に参加したが、その隷下は次の如くであった。

第四艦隊・第六艦隊・第六水雷戦隊・第七潜水戦隊

第二十二航空戦隊（マロエラップ）

第二十四航空戦隊（ルオット、ウオッセ、マロエ

ラップ）

陸上部隊としては次の如くである。

第三根拠地隊（バラオ）

第四根拠地隊（トラック）

第五根拠地隊（サイバン）

第六根拠地隊（クエゼリン）

南洋部隊は二個艦隊、二個戦隊、二個航空戦隊、四個根拠地隊を以って内南洋を中心とした地域確保、グアム、ウエーキ島の攻略をした。

昭和十七年四月、第五十二警備隊は第六十二警備隊となり、第六根拠地隊、司令官、海軍少将秋山門造の指揮下に入った。

第六根拠地隊の編成は次の如くである。

司令部（クエゼリン）、第六通信隊（クエゼリン）

第六潜水艦基地隊（クエゼリン）

第八〇二航空隊（ヤルト、ルオット）

第九五二航空隊（ヤルト、ルオット）

第六一警備隊（クエゼリン）

第六二警備隊（ヤルト）

第六三警備隊（マロエラップ）

第六四警備隊（ウオツゼ）

第六五警備隊（ウエーク）

第六六警備隊（ミレ）

第六七警備隊（ナウル、オーシャン）

その任務は、ヤルト島航空基地の防備警戒、当海域の港務管理及麾下艦艇を以て当方面作戦部隊に対する支援、輸送、補給業務並に当方面海面における対哨戒、見張業務の実施である。

執筆者・根津茂の勤務した第六十二警備隊の編成は次の如くである。

司令、海軍大佐千々波長次↓海軍少将升田仁助。

第一分隊（指揮小隊・銃隊・本部・甲板士官・航

海・衛兵司令・砲術）

第二分隊（高角砲台・機銃砲台・砲台電気）

第三分隊（運用・戦車・舟艇・港務）

第四分隊（通信・探信儀レーダー）

第五分隊（内務・主機・補機・電気・燃料・車両

・輸送）

第六分隊（軍医・医療・衛生）

第七分隊（経理・衣糧・功績・主計・庶務）

第六十二警備隊及、関連戦歴の概要

昭和十七年八月十六日、マキン派遣隊とし、アメリカ海兵隊二二名の襲撃を受けるも撃退（戦死四六名、事実上全滅するも、後に友軍再占領）。

昭和十八年五月十九日、南海第一守備隊、ヤルト環礁南東水道付近で米潜の雷撃を受け沈没、救助された三〇〇名は第六十二警備隊に収容され兼松隊となる。

十一月十六日、米空軍機の銃爆撃連日、電波探信儀により「対空戦闘」発令交戦。

昭和十九年一月十八日、南洋第一支隊第二大隊、兼

松隊を編入し防御態勢を強化、二月六日、クエゼリン、ルオット島第六根拠地隊守備隊玉砕、一月～六月頃、米機B 25、地上施設（砲台、戦闘司令所等）集中爆撃。十月より四ヵ月間、一日小型機八〇～一二〇機連続襲撃。

第六十二警備隊関係各隊の兵力推移

（昭和十九年一月～同二十年九月兩時点の兵力）

第六十二警備隊 （七〇七―五七〇名）

陸軍 （七一九―六三七名）

設営隊 （一九六一―一八〇名）

施設部 （四三六―三三九名）

軍需部・工廠・航廠・郵便局・測候所  
（四〇―三六名）

南洋庁・一般邦人（一〇四―七六名）

その他 （三二―二九名）

合計 （二二〇―一九〇七名）

クエゼリンの第六根拠地隊司令、ルオット島の第二十二航空隊司令以下全員米上陸軍と戦って玉砕した。

両島の間にあつたヤルト島は空襲・砲撃で全島破

壊されたが、終戦まで降伏せずに耐えた。第六十二警備隊司令官海軍少将秋山門造は降伏後、自ら責任を感じ、復員せず自決された。